



大いなる水、 内陸へ向かって 歌う石 て流れる川

イグアスの滝

イグアスとは先住民族の言葉で「大いなる水」の意味。アルゼンチンとブラジルにまたがる世界最大級の滝。

© EMBRATUR / メルコスール観光局



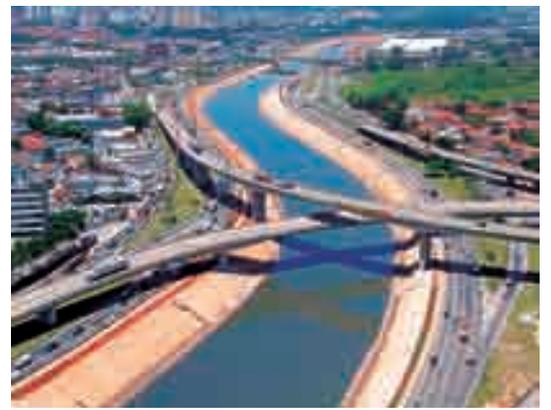
イタイプダム
イタイプとは先住民族の言葉で「歌う石」の意味。1991年に竣工した世界最大級のダム。全長は約8キロに及ぶ。

© SENATUR / メルコスール観光局





イエズス会伝道施設(レドゥクシオン)跡 © SENATUR / メルコスール観光局
 西欧の宗教が現地の信仰と融合し、先住民の間にキリスト教が広まり、農牧業や活版印刷などの技術も伝えられた。



改修されたチエテ川 © JICA
 日本とブラジルをつなぐ友好のシンボルの一つとなった。

日本とブラジルは2015年、外交関係樹立120周年を迎えた。ブラジル南東部にある南米最大の都市サンパウロは、日本企業が数百社進出し、縁が非常に深い街の一つだ。グアルーリョス国際空港から車でサンパウロの都心部に向かう。間もなく国道沿いにチエテ川が現れる。かつて12月から3月の雨季になると、毎年のように洪水が発生した。建物の浸水や道路、電気、水道といったライフラインの遮断、伝染病の蔓延など、人命にかかわる災害をもたらしていた。

日本政府はJICAを通じてサンパウロ州水・エネルギー公団が実施するチエテ川流域環境改善事業に円借款を供与し、河川改修や護岸工事、上流域のダム建設などを支援した。1995年から約8年間に及ぶ大事業によって、洪水被害は劇的に減少した。

サンパウロの街は標高760メートルのなだらかな高原に広がっている。高低差が少なかったため、チエテ川の水は流れにくい。7月から8月の乾季には、ごみやヘドロが溜まり、悪臭が漂っていた。それも昔の話となった。浄化作業が進み、魚が棲める川にやみがえった。我々は「川は海へ向かって流れる、だから、近くに海があれば川の水はその海の方へ向かって流れるもの」と普通は考える。でもチエテ川は違う。約60キロ先の大西洋の方向ではなく、逆に、500キロ以上も内陸の方向へ向かって流れていく。「セーハ・ド・マール」(ポルトガル語で海岸山脈の意)から内陸へ向けて土地が下がっていったためだ。大西洋に並行して約1500キロを貫くこの南米大陸東岸の分水嶺は、太古に南米とアフリカが一つの大陸だったことを物語っている。



パラナデルタ © Vanda Biffani / メルコスール観光局
 ラプラタ川へ流入するパラナ川の河口部に巨大な三角州が広がり、多くの小河川や運河が網目状に走っている。



ラプラタ川 © De Agostini/N. Cirani / ゲットイ イメージズ
 スペイン人が「銀の川」であることを願って命名した。プラタ(Plata)は銀、ラ(la)は女性定冠詞。河口部は約270キロの三角江となっている。

サンパウロの雨は、ゆったりとチエテ川からパラナ川に流れ込み、パラグアイに達する。ここで太平洋プレートとの衝突によって隆起したアンデス山脈に行く手を阻まれる。川は流れを大きく南に変え、さらに数千キロの旅を続ける。流域には太古の地殻変動で広大な台地に出現したイグアスの滝、17世紀から18世紀にイエズス会宣教師がジャングルの奥深くに築いたレドゥクシオンと呼ばれる伝道施設の跡、現代の経済活動を支える電力や水資源を生み出すイタイプダムなどがあり、川は多くの人々の暮らしを育んでいる。

そしてアルゼンチンとウルグアイの国境を流れるときにはラプラタ川となり、ブエノスアイレスあたりで、ついに大西洋へと注ぐのだ。